

◆【海員随想】はるかなる南氷洋② 谷頭正仁

— 日新丸、第2日新丸、第3日新丸 —

12月8日、操業開始。松本船長は航海士の甲板当直に、南氷洋未経験の次席三航士の自分を指名した。どうしようもない。何もかも分からなかった、最後まで分からなかった。

ありとあらゆるところに迷惑を掛けた。一航士はいろいろとアドバイスをしてくれたが、基本的なことを全く知らないなので、どうにもならなかった。用具を貸してもらえなかったし、24時間当直なのに、朝昼夕の3食以外に夜食もなければ、お茶もなかった。夜は腹が減った。このことに関してはいとも腹立たしいことがいろいろあり、かなりの人に迷惑を掛けた。

いろいろあった後、事業員食堂は常時開けており、飯、みそ汁、鯨肉が用意されていることを知った。事業員の食事の終わった後、そこで食事をさせてもらうことにした。飯もみそ汁も鯨肉の焼き肉もおいしかった。

夜食では後々も、いろいろと嫌な思いをした。甲板部、機関部、無線部、司厨部、事業部によって当直時間が違うことからの発生であろう。後年、昭和50年代の半ばに第2日新丸において、いわゆる6・6制が発効して、この問題に終止符を打ったのであろうが、漁労船はいずれにしても大変である。冷凍船の仕事は母船より肉を受けて、冷凍することである。そのために大発艇を使用する。大発が運航できるか否かが、操業に大きな関係がある。幸いにして、大発運航に関して負傷者は出なかったが、大発の運航は、非常に危険な作業です。1回だけ乗ったことがあります。波のショックの強さのみ覚えていますが、特のその降下、揚艇は常時危険です。若干の手当が付いていたと思いますが、まさに南氷洋です。

「海員だより」